慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	欧洲大戦と伊太利の態度
Sub Title	
Author	占部, 百太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.8 (1914. 10) ,p.930(20)- 950(40)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19141000-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歐洲大戰と伊太利の態度

占部百太郎

今回の歐洲大戰亂に關する外交上の問題に就て最も世界を驚倒せしめたのは、極めて平和主義なる英國が獨逸の自耳義中立侵害に憤激して猛然露佛に味方して戰爭に加はつた事と、三國同盟側の伊太利が逸早く嚴正中立を宣言した事である。英國が其の商業上の利害からして、一衣帶水を隔つる白耳義の獨立の爲め劍を拔いだ事は史上幾多の例があることで敢て異とするに足りない。英國が如何に平和を愛すればとて、又如何に愛蘭自治案等の內爭に熱中して居たればとて、最も自國の商工業に密切の關係ある此の永久中立地に侵入されて、尙且指を咬へて默視して居る者であらうと高を括つたのは、カイゼルが一生の不覺と謂はねばならぬ。

然し一方、伊太利が局外中立を宣言して事實上三國同盟條約を破棄したのは、獨墺兩强に取て大打擊たること勿論であるが、伊が此の兩强の怨惡、激怒並びに後日の復讐をも恐れずに、此の如き大膽なる態度に出でたのは、必ずしも其の由つて來る所の大なる理由がなくてはならぬ。伊は既に同盟の舊誼を重むじて獨墺を助けざることを宣言したのであるが、果して戰局の最後まで中立の宣言を嚴守するであらうか。曾に兩强を助けざるのみならず、却て反對に聯合軍側に加擔して平和回復後幾分の獲物に有り附く可く、最も自家に都合可き時機を見込むで洞ケ峠を下るのではあるまいが、是れは今日に於ける大なる疑問である。佛のデルカッセと露のウィッテが先頃時を同じうして伊太利當局を訪問したとの風說は一概に信ずることが出來ないにしても、協商側の外交家が連りに伊を慫慂して味方に牽き着けむと努力して居ることは想像が出來るのである。余は左に伊太利が三國同盟に加はつた由來から英國及び佛露兩聯盟國に對する利害の關係を略叙して、伊が今後大戰亂の進展するに從ひ、結局如何に嚮背す可きかに就て揣摩臆測を廻らして見たいと思ふ。

二

一八八二年伊太利が獨墺同盟に加入するに至る迄の同國の狀勢は如何であつたかと云ふと、一八七〇年の戰爭に佛蘭西が羅馬法王守備兵を本國に引き揚げ、ヴィクトル・エンマニュエルの軍が羅馬を占領して以後、伊は名實共に獨立國となつて、サルデニア王は茲に始めて統一の大業を遂げたのであるが、其實一八七四年十月十三日に至る迄、佛の小巡洋艦は依然法王護衛の爲めチビタ・ヴェッチアに碇泊して居たのである。伊が其の統一の大業を遂ぐるには、勿論普魯士の力に負う所も少なくなかつたが、最も大恩を蒙つたのは佛のナポレオン三世に對してであつた。仍て佛が獨に大敗を取つた後と雖も、伊は常に佛兵が再び羅馬を占領するが如き事はあるまいかと危惧の念を抱いて居つたのみならず、伊國政府が有力なる近世式海軍を建設せむと決心したときにも、地中海に於ける佛國の利益を脅かすものであると佛から猜忌されたのである。一八七八年の伯林公會にも伊は代表者を列席させはさせたが、辛と國内の統一が出來たばかり間がないので其の勢力は固より微々たるもので、他の列强が夫れ〳〵旨い汁を吸つたにも拘はらず、伊は一物にも有り附かず、其の代表者は空手で歸國したのであつた。當時墺露兩强の使臣は伊の使臣に向つて、密かに阿弗利加のチュニスを占領せむことのサッジェッションを與へたけれど、伊は佛の意を圖り、兼ねて手を下だし得なかつたのである。

所が一八八一年佛蘭西は突然チュニスを占領した。其れは佛の屬邦たるアルゼリアとチュニスが境域を接する爲め、蠻族が絶へず佛領内に侵入する其の禍根を絶つが爲めと云ふのであつた。伊國朝野の驚愕と憤恨は非常であつた。佛が何故伊の最も懇望して居る―併かも羅馬が往昔征服したカルターゴの地を征服したかと云ふに、是れは何うも例のビスマークの指金たること疑を容れない。伯林公會に於て「正直なる仲買人」を標榜したビスマークは露西亞の全權ゴルチャコッフを飜弄して土耳古から獲た露の戰利品を殆ど奪ひ上げ、獨の後援に依て墺は一及に劒らずしてボスニア、ヘルチェゴビナを併有し、英は土耳古に後援したる報償として地中海のサイプラス島を獲たのであつた。所が列强中（當時伊は未だ歐洲の强國中に伍せず）佛は惟り何の獲る所なくして怏々たる有樣であつたのでビスマークは成る可く佛の注意をアルサス、ローレンスの兩州から他に轉向せしめむとして居た

し然も當時獨は未だ地中海に利害の關係を有たなかつたので、密に佛が阿弗利加に活動するも反對せざる意を仄めかしたのみならず、英の一全權ソールスベリイ侯は佛の全權ソッヂントンに向つて、佛が英のサイプラス島を獲得するも之を默認した代りに、佛がチュニスを占領するも敢て故障を申さざる旨を語つたのである。英獨の後援に意を强うした佛は伊太利及びチュニスの宗主權を有せし土帝の抗議にも拘はらず、遂に前述の如くチュニスを占領して其の保證權を確立して了つたのである。伊太利上下の動搖は非常で爲めにカイロリ內閣は顚覆した。是れが抑、伊が三國同盟に走つた重もなる原因なのである。一方に於ては佛の對獨復讐心を柔らげ、之と同時に伊を慍らせて、結局同盟に加はらしめたビスマークの外交政策は恰も一石で二鳥を落す樣なもので、何時もながら巧妙を極めたものであつた。

二

此の如く伊は佛に對して非常に敵愾心を起したけれど、到底獨力で佛と組打するだけの力は勿論ない。夫れに伊の先覺者は佛の共和政府が第二帝政の政策を踏襲して、伊國王が目の上の瘤として居る羅馬法王廳と同盟を繼續（佛政府の此の政策は多數の舊教徒懷柔の爲めなること云ふ迄もない）せるのみならず、ナポレオン三世の政策と均しく佛の共和政府が依然伊太利半島を佛國の利益の犧牲に供せむとする野心を看破したのである。加之のみならず、王國の建設日尙ほ淺き時に際してサルヂニア王家が最も過激なる共和主義のガムベッタが政權を握れる政府とは到底相容れる餘地はないのである。仍てチュニス占領事件で伊の佛に對する敵愾心の熾烈なる時に際し、機を見るに敏なるビスマークは、伊には未だ Irredentist 即ち墺に對する復領運動（後に說く）の熄まなかつたにも拘はらず、一八八一年十月維納にて貳帝一王の會合を遂げしめ、伊の愛國者等の驚愕と嫌厭の裡に伊國王ウムベルト一世は墺地利名譽陸軍大佐となつて歸還した。三君主の會合の翌年一八八二年五月二十日デプレティス內閣は遂に一八七九年に締結せられて居た獨墺同盟に加入する事になつた。此の第一回三國同盟の期限は五ヶ年で其の條件は公布せられなかつたが、三强相互に各自領土の保全を保證して、何れの國が攻擊せらるゝ場合にも之を援助す可き事を約束し、而して佛或は露或は兩强と開戰の場合

には各諸盟國が出兵す可き兵數をも規約したる事は疑ふ可からざるが如し（ホルド、ローズ最近歐洲諸國民之進展第二版三三〇―三三一頁）

此の如く伊太利は一時の感情に驅られて三國同盟を結むだけれど、是れが爲めに國力に不相當なる軍備を擴張するの義務を負はされ、重きが上に更らに重い租稅を賦課されて國民の不平は諸方の暴動となり、大仕掛のストライキとなりウムベルト一世の暗殺となり（一九〇〇年）新王國の基礎も爲めに幾度か危殆に瀕するに至つた。余は茲に伊國軍備擴張に就て説くの煩を敢てしないが、有名なる伊太利の經濟學者が一八九八年に於て、英國の勞働者は其の收入の二十分の一を租稅として納むるに比して、フロレンスの勞働者は其の收入の四分の一を下らざる高を國稅及び地方稅として誅求せられて居る。と述べて居る。此の一事より推しても伊太利がクリスピイやロビラント（維納駐箚伊國大使）やディラウネー（伯林駐箚同大使）等に誤られて、一等國に伍したいと云ふ國家的野心の爲めに不自然なる同盟に加はるの愚舉を敢てしたかゞ察せらるゝではないか。勿論伊が此の同盟に加はつた爲め佛に對する危險の度を減じ多少國家の安心を得たのは拒むことが出來ない。然し當時犬猿の間柄であつた英と佛が埃及で爭つたとき、伊が佛に代つて埃及に地歩を占む可く英に加擔したとき佛若し伊を攻擊する如きことあらば獨墺は兵力を以て伊を援助す可しとの三國同盟の約束は後日英の誘引に伊が應ずるだけの勇氣と實力を有たなかつた事實を見ても三國同盟は徒らに獨墺の二强を利益したに過ぎなかつた事が解る。夫れから協約締結の際、伊國政府は露が佛の二州回復戰爭に加はらざる限りは同盟の範圍を露との敵對行爲に及ぼさゞらむことを主張したけれど、墺が露と東邦問題に就て大に利害を異にする限り伊の提議に同意せず伊は利害關係の密切ならざる露とも戰はねばならぬ義務を負はされたのである。要するに第一回の三國同盟は獨墺の二强だけに利益を與へて、伊は單に其の國家の虛榮心を滿足せしめたに過ぎないと云へは云へるのである。

四

英國と伊太利は古來傳説的に親交の間柄であつたのであるが、アラビ　パシャに對する伊國民の同情は一時英伊の間を疎隔して了つた。所が阿弗利加に於ける佛國の活動が漸く熾むになつて來たので、英は之を牽制する爲め一八八四年デブレ

ティス內閣に向つて英の好親國が紅海沿岸に於ける或る地點を占領するも英は之に故障を唱へざる可しとの旨を間接に通知した。伊は既にチュニスを佛に占領されて了つたけれど、阿弗利加の何處かに殖民地を欲しかつて居た際であるから好機乘ず可しと做してアビシニア遠征を企てたのである。是れ伊が阿弗利加に兵を送るも、陸に於ては三國同盟の保障があり海に於ては英海軍の援助あるを頼みにしたからである。所が此のアビシニア遠征は結局非常の失敗に畢つた。是れより先きデプレティスは死むで、クリスピイは再び內閣を組織したが、かくアビシニア遠征失敗の矢先きで最も外援を要する際であつたので併かもクリスピイは又もビスマークの爲めに巧みに籠絡せられて一八八七年此の伊の爲めには極めて不利益なる同盟協約は向ふ五ヶ年間更らに繼續せられた。再訂の協約は防禦同盟であつて、諦盟の一國は他の二國の何れが他强に對して侵擊的態度を執るときにも之れが爲め戰鬪に加はるの義務はないのである（スティルマン伊太利統一史三七四頁）

五

所が一方に於て久しくビスマークの巧妙なる外交政策の爲め歐洲に孤立して居た佛蘭西はメキ〳〵と國力を恢復して來て、政體其他の國狀が極端に相違して居るので提携が到底不可能と思はれて居た露西亞と一八九一年同盟するの運に至り、翌一八九二年には露佛の間に軍事協約が締結されたのである。然るに一方佛伊の關係も歲月の經過と共に漸く變遷して來た。前に述べた如く伊は一時の感情に走つて獨墺に赴いたものゝ、伊と佛とは人も知る如く宗教、人種、風俗等に共通の點多く、伊國人の眞個の同情は夙に寧ろ佛國に向つて居るのである。之を經濟的關係から觀察しても、伊は三國同盟に加つた關係からして一旦佛と結むだ通商條約をば期限に先だつこと五年即ち一八八六年に廢棄したのである。所が伊國の農業も工業も之が爲め俄かに大打擊を受け爾來僅かに二箇年を出てざるに伊より佛への輸出は約六割五分方の減少を見るに至つた。然かのみならず、佛も伊の此の仕打に對する報復として伊國公債を巴里のブールスから排斥した上に、佛國資本家の伊國から回收した資金は實に七億フランに達したのである。伊の經濟社會並びに政治社會の恐慌は非常なものであつた。仍て伊は已むを得ず、一八九六年十月曩

きに廢棄した伊佛航海條約を復活せしめ更らに一八九八年十一月佛との關稅戰爭を熄めて再たび通商條約を締結するの餘儀なきに至つた。

更らに政治上に於ても佛國が伊太利のトリポリに對する要求を默認したので其後兩國の國交は大に改善せられたのであるが、一九〇一年兩强は地中海に於ける利害の一致を見たので協商を結び其間の親交は一層加はつて來た。一九〇二年早々佛の駐伊大使は羅馬在往の佛國人に對する演說に於て、兩拉丁民族の間に衝突は最早起り得べからずと宣言するに至つた。一九〇三年十月伊王ヴィクトル、エンマニュエル三世及び王妃エレナは巴里を訪問せられ、一九〇四年四月佛國大統領ルーベの羅馬答訪は法王の抗議を招いたにも拘はらず、非常に兩國間の親密の度を進めた。佛との關係が此の如く漸次變遷して來たので伊のルヂニ內閣は夙に一八九一年第二回同盟條約の滿期の時既に三國同盟から衷心脫退せむと冀つたけれど、當時第二次の三帝同盟が締結せられて居たので一時獨と接近しかけて居た露の希望に因り伊は遂々三帝國に壓迫せられて、三度び同盟を締結したのである。然し一方英佛との關係もあるので伊は又以前の如く協約に因つて生する兵備の義務も充分に之を履行しない、從つて一旦伊が獨墺の爲めに戰爭に馳せ加はる事を餘儀なくされても、兩强の期待通りに動員することは不可能であるとは、軍事通の豫ねて指示して居た所である。

六

此の如く伊太利の同情は漸次獨墺側から離れて、佛に向つて來たにも拘はらず、紙の上の同盟は其後一九〇二年六月又も向ふ拾貳ヶ年間繼續せられた。伊國の政治家は屢〻議會に於て三國同盟と伊佛の國交は決して相矛盾するものでないと公言したけれど、其實二强と伊との利害は漸次阻隔し來つたのである。即ち一九〇五年モロッコ問題に關して列强がアルゼチラスで會議を開いた際にも、橫暴なる獨のカイゼルの使臣に味方したものは、唯だ墺國の全權あるのみで、伊の使臣は獨の慍りを買つても尙且佛に對して援助を與へた程で、當時既に伊は今日の態度を豫示して居たのである。是れは佛がモロッコを占領するよりも獨がモロッコを手に入れる方適に伊に取つて危險なからである。夫れで此の會議終結後カイゼルは墺帝に對して懇篤なる謝辭を述べたけれど、伊太利がヴェスヴィアス噴火の大災

厄に會つたに係はらず、カイゼルは之に對して一通の吊詞さへ送らなかつた。

更らに最近に至つて、伊太利が英佛に對して一層接近すると恰も反對に同盟の二國殊に墺に對して反感を抱くに至る幾多の現象は發出した。先づ伊が最初同盟に加はつた動機の一つは追々と勃興して行く獨逸の產業發展の結果獨逸商品の多くが伊の諸港を通じて輸出さるゝであらうとの期待であつが、是等の商品は悉皆ブレーメン漢堡の二港及び和蘭白耳義の諸港より輸出せられ、伊の希望は全然水泡に歸して了つた。是れが伊獨の國交冷却したる一原因たること疑を容れない。

次に伊と墺とは元來友國に非ずして非常に仲の惡い間柄である。前に述べた一時の感情から接近はして居るものゝ、伊太利殊に北部のミラン、ヴエニス、ロムバルデー、ピィドモンドの諸地方が統一前墺地利から受けた虐政に對する怨惡の情は今でも中々忘るゝ事が出來ない。夫れに伊太利には全伊太利主義とも云ふ可き舊傾回復運動の一派がある。即ち以前伊太利人の領地であつたトレント及びトリエスト以北のダルマティア地方を墺地利の手から奪還しない限りは伊太利の獨立統一は完成したものと云へないと唱道するのが、所謂復領主義者（Irredentist）の主張である。此の復領運動は晩近に至て、墺が其の配下の伊太利人を虐待するので時々氣勢を揚ぐるのであるが之と同時に墺が獨の後援を恃むでボスニア、ヘルツェゴビナ二州の併合を斷行したり（一九〇八年）其他バルカン半島に於て活動したりするので、是迄伊墺の關係は度々切迫し、墺國軍人の間には排伊太利黨があつて從來屢〻伊國攻擊の噂が立つたのである。夫れで同盟の目的は其實兩國の間に破裂の恐れある戰爭を防遏するに過ぎないとさへ傳へられて居るのである。

墺と伊の利害が何程に相容れないものであるかと云ふに、墺は警察其他官憲の力を用ひてアドリアチック沿岸の地方（ツリエスト附近）に於てはスラーヴ民族を優待して伊太利人を壓制し、トレント地方に於ては、獨逸人を指嗾して屢〻伊太利人を迫害するのである。伊太利人は是迄屢〻墺國政府に向て伊國人の爲めに特種の大學を建設せむことを歎願したけれど徒らに伊本國に於ける復領運動の種子を蒔く樣なものであるとの趣意からして、墺政府は之を拒絕した。仍て伊國語を話す學生も不得已獨逸語の大學に入るの外なかつたのである。然も伊太利人の切望熄

まないので、墺國政府も多少其意を酌むで、インスブルックに伊國語の法科大學だけを設立する事となつた、所が此事に對して獨逸族及び獨逸族學生は痛く激昂して是等の獨逸人は伊太利人から何等の手出しもしないのに一九〇二年と一九〇三年の兩度亂暴にも伊國人に對して暴行を加へた。其れが爲め伊太利本國では復領運動が一層氣勢を加へて來た。其後一九〇四年にも伊太利人の敎授や學生がインスブルックで非常に多勢の獨逸人の爲めに攻擊された。固より衆寡敵しないので、伊國人側では正當防禦の上から持合はせ旋條銃を發射したので爲めに兩方の側で多少の負傷者を出だした。夫れから墺都維納でも時々排伊的示威運動が行はれ一方ダルマチアやクロティアに於ける伊太利種の漁夫及び勞働者も半野蠻のクロティア人の暴徒から攻擊さるる等の外交上の所謂インシデントは屢〻繰返されたのである、夫れから他に伊が墺に對して慊焉たるものは（佛の共和黨が僧侶黨を征伐して全然政敎分離を遂行する迄、伊佛の關係が兎角面白くなつたと同じく）伊國政府と最も不和な法王廳に對する墺國政府の態度である。是れは墺政府が舊敎徒たる墺國帝室の强烈なるクレリカルの傾向と夫れから有ゆる墺國の問題に對する僧侶黨の勢力に動かさるゝからである。

七

然し墺地利と伊太利と實利害が最も衝突するのは實にバルカン問題である。伊の輿論は墺がアルバニアに對して種々の政治運動を爲す度毎に激昂したのであるが、墺が若しアルバニアを掌中に收めて伊のオトラント海峽を支配す可きヴアロナ港を將來海軍鎭守府たらしむるが如き事あらむか、是れ到底伊の忍容し得る所でない。之れと反對に伊がアルバニアを自由にすること起るも是れ亦到底墺の堪ゆる所でない。兩國共に官邊にては現狀維持を聲明し歷代の伊國外相は議會に於て、伊墺兩國はアルバニアに關して全然利害の一致を見たりとの宣言を繰返して居るけれど、實際裏面に於ける兩國の競爭は慘ましいものである。兩國何れも北部アルバニアの舊敎徒の甘心を得むが爲め或は宗敎上の組合を設けたり或は學校を建設したり、或は汽船會社に補助金を給與したり、其他有ゆる商業上の優勢を獲むとしたりして、所謂平和的經濟侵入政策を執つて競爭して居るのである。一九

○八年エーレンタール男が提言したノビバザール縣から結局サロニカに到達す可き軍事鐵道の計劃は、一時非常に伊國の輿論を沸騰させたけれど、是れは最近に於けるバルカン戰爭の結果セルヴィアが其の領土を擴大させた爲め、頓挫した姿であつたが、墺がバルカン半島に對する野心は容易に放棄するものでない事は云ふ迄もない。

之を要するに兩强の軍備擴張や、伊國內に於ける排墺運動や墺の壓迫を受けて居たモンテネグロと伊國王室との血族關係（人も知る如く伊國王妃はモンテネグロ王の娘）と云ひ、墺國內に於ける汎獨逸人運動と云ひ、相反對する鐵道政策（前記のノヴィバザール鐵道に對し伊はセルヴィアの計劃するダニューヴアドリア鐵道に對し千六百萬圓の補助を約束した）と云ひ、何れの點より觀察しても墺伊の關係は決して樂觀す可き狀態ではないのである。

此の如く伊墺の關係は甚だ妙ならざるものあるにも拘はらず、三國同盟は昨一九一三年十二月更らに向ふ拾貳ケ年間繼續せられた。其の內容は發表せられないが、伊國の獨墺に對する關係の變遷するに從ひ其の新らしき境遇に適應せしむ可く多少條件の變更せられたることは想像さるゝのである。是れより曩き一九一三年七月伊國王及び王妃は外相を伴ひ瑞典訪問の歸途キールに立寄つて獨帝及び獨逸外相に會見したのであるが、其時の兩君主の話題は三國同盟の繼續及び伊國の阿弗利加に關する利害問題に關係したのであつたと、世間では臆測して居る。チユリン發行のスタムパ（Stampa）新聞は此の會合に就き說を爲して曰く「キール會見に於て何等官邊の報告は爲されざれども、如何なる話題が兩君主兩外相の會話に上ぼりしかは、吾人の推察に難からざる所なり。當時討議せられたる主題は今日我が伊國外交問題中の最も重大なる一問題即ち伊は三國同盟に於て其の亞細亞政策の立脚地を發見し得べき乎。或は之が立脚地を三國同盟以外に求めざる可からざる乎」と云ふのである。此の說の眞僞は措き伊は輓近小亞細亞海岸に於て利權を得むとの希望ありとは世間一部に於て信ぜられたる所であつた。

八

以上は今回の歐洲大戰爭に方つて伊太利が中立を宣言して、然も動もすれば同

盟側の獨墺に背いて却つて英佛側に同情を表し、或は聯合軍に味方して蹶起せむかの態度を說明して略ぼ要領を盡くしたりと信ずるのである。以上の要旨を一括して云へば伊は一時の感情に走つて獨墺と同盟を結び爾來甚だしき利害の衝突なくして三十二年の久しき兩國との協約を持續し來るには來つたが、一方地中海の主人たる英國とは傳說的に云つても、實際の利害から云つても到底敵對する事が出來ない。又佛と伊とは人種宗敎其他の關係が密接なるのみならず。一國の生命たる經濟上の切るに切られぬ實利害の關係が繫つて居るのである。其の上聯合側の露西亞とは主權者間の血族關係がある上にバルカンに於て露と伊との利害（例せばセルヴィアの企劃せるダニューブアドリア鐵道に關する如き）が一致して居る。何れの點から觀察しても伊太利が今後獨墺の爲めに立たうと云ふ事は絕望であるが、先頃の外電が屢〻傳ふる如く、三國協商側に加擔する事は既定の事實であつて、其の愈〻戰爭に加はるのは單に時日の問題であるかも知れない。伊太利今回の中立宣明が獨墺側に取つて非常の大打擊たること云ふ迄もないが、墺は知らず獨逸は平生一朝歐洲に戰爭破裂したるときは、墺伊の同盟の援助に餘り重きを措かずして、結局獨力を以て外敵に當るの覺悟であつたとは、有名なる獨逸の歷史家オンケンが夙に聲明して居る所である（ゲムブリッヂ近代史第十二卷獨逸帝國の部參照）がデーリー、メールの伯林通信員フレデリック、ウイリアム、ワイル亦「獨逸人は本來伊太利が熱心と信用とを以て三國同盟の約束を固守す可しと觀察する能はず。若し恐る可き戰爭の破裂することあらむか、獨逸と墺地利のみが歐洲の敵國に面するの餘儀なきを發見するなる可し」と豫想して居た。（他に墺獨の間に强固なる攻守同盟條約締結せられたる事勿論なり）。是等の豫言は果して適中し、伊太利は遂に同盟を脫して了つたが、獨逸が今回大戰爭の破裂當初から克く歐洲の諸强國を引受けて白佛の側に於ては一時連戰連勝するに至つたのは、其の平生の覺悟と之に伴ふ準備の周到なるが故で敵ながらも是等の點は大に歎賞するの價値があると思ふ。余は繰返して云ふ、伊太利は結局歐洲の大戰が何れの側の勝利に歸するか最早形勢の明白になつて來て自國に取つて最も都合の宜しい時機を見濟まし、猛然中立の假面を脫いて何れかに味方し、戰勝の獲物に有り附かむと努む可きは、殆ど想像が出來るのである。而して其の結局聯合側に左袒す可きは殊に英佛側

の昨今の勝利に徴しても、殆ど疑を容れざる所である。（九月十三日稿）

資本の實體に就て（一）

堀切善兵衛

一

學術上に於て資本と稱する所のものと、通俗に資本として了解するものとの間に大なる相異の存することは少しく經濟學の素養ある者の容易に感得する所なり。然るに今日世間の經濟論を試むる人々の多くは何等經濟學上の素養なく、唯銀行會社等の實業に從事し居りて多少世俗の間に信用せらるゝより往々臆說獨斷を逞ふするものあり、又世間の新聞雜誌記者の如きは極めて貧弱なる經濟學上の智識を以て漫りに我見を主張して、何等の研究的態度と新進の智識とを具有すること無きが爲め其論議する所却て健實なる國民經濟の發達を呪詛し人々を疑惑の渦中に陷れつゝあるもの少なからず。例へば外資輸入の可否を論ずる際の如き